

未来への伝承

167

山ノ荘の流鏑馬祭と東城寺の「一つ物」

桜の季節、新治の山ノ荘を舞台に行われる流鏑馬祭を、皆さんはご覧になったことがありますか。茨城県指定無形民俗文化財の「日枝神社流鏑馬祭」は、大猿退治伝説に彩られた大変珍しい流鏑馬です。

むかし、コウカ(ネムノキ)の大木に大猿が棲みつき、里の作物を食い荒らし、農民を困らせていた。供物をささげても治まることなく、ついに東城寺から稚児を選び、人身御供として差し出すことになった。それを知った甲山城主の小神野從羅天は弓の名手市川將監を頼み、力を合わせて大猿を退治した。

この伝説を再現するのが毎年4月に行われる流鏑馬祭です。祭礼には從羅天・將監・一つ物という三役が登場します。從羅天は、小野地区の小神野家の当主が代々務めてきました。祭礼では最初に登場し、馬場を疾走します。これは、將監に力添えを頼みに行く場面を表していると考えられます。將監は、かすみがうら市

高倉の市川本家の当主が世襲してきました。祭礼では最後に登場し、大猿に見立てたコウカの的を射る流鏑馬を行います。確実に的を射ることによって山ノ荘に平穏もたらされるため、將監の流鏑馬は神事としての側面をもっており、武芸や技を競う流鏑馬とは異なるものです。

もう一人の主役は大猿へ差し出される人身御供役で、一つ物と呼ばれています。東城寺地区の男児が務めてきました。生け贄の役とされる一つ物ですが、美しい装束を身にまとい、化粧をして、頭に山鳥の尾羽をさした花笠を被る特異な装いで馬に乗って登場します。実は祭礼に一つ物と呼ばれる稚児が出るのは、山ノ荘に限りません。京都や奈良をはじめ、中世の大きな寺社の祭礼で、同じような装いの稚児が登場しており、一つ物と呼ばれていました。現在も、和歌山県や兵庫県の祭礼で一つ物を目にすることができます。民俗学では、その異装や、地に足



「一つ物」の衣装(個人所蔵)

をつけてはいけないうとする禁忌から、一つ物の本質は童子に神霊が依りつく「憑坐」であるとの解釈がなされてきました。また、神輿渡御の行列に登場することから、華やかな出で立ちで人々の目を引いた「風流」とみる解釈もあります。いずれにしても、中世の祭礼における稚児が一つ物であり、東城寺の一つ物はそれを現代に伝える貴重な存在なのです。

從羅天や將監は戦国期に小田家の家臣であったとの伝承があります。そして、東城寺の一つ物もまた中世の祭礼にルーツをもちます。古い祭礼の要素を残しつつ、大猿退治の伝説に彩られることで現代に伝承されてきたのが、山ノ荘の日枝神社流鏑馬祭なのです。

新型コロナウイルス感染症の影響により、今年の流鏑馬祭は中止となりました。博物館では、祭礼の舞台となる山ノ荘の歴史と祭礼文化を紹介する特別展「東城寺と「山ノ荘」―古代からのタイムカプセル、未来へ―」を5月5日(水)まで開催しています。ぜひご覧ください。

岡市立博物館(☎824・2928)